



【ものづくり・人づくり・地域づくり】2018 年度活動テーマ ～素材を活かしてわが家の味～

6/9 第 45 回通常総代会 ～ダイジェスト (2)～

総代会第 2 部は 石岡鈴木牧場牛乳完成お披露目会



牛乳でみんなカンパ～イ!(^^)!



鈴木さんとお付き合い始めた当初から関わって下さった、組合員も駆けつけてくれました!!

鈴木牧場とお付き合いを始めたところからの組合員を代表して !!

第 15 期副理事長 利根町の岩下 長子さん

今日は利根町から参りました岩下と申します。牛乳のこととかまったく知らなくて、何でも一緒かと思っていたんですね。生協に入って理事として、いろいろお勉強させてもらっていたそういう時に鈴木さんとお知り合いになりました。もう、やっとね、念願の牛乳作りをはじめられて、大変喜んでいるものの一人でございます。

ます。

本当にありがとうございます。待ちに待った牛乳ですね。理事としてお会いするたびに鈴木さんはいつも熱く熱く語ってくれて、みなさんもご存じだと思うんですけど、健康な牛乳は健康な牛から、健康な



牛は健康な飼料からって、それをするにはまず土づくりからだ、もういろんなお話をしてくださって、違いがわかるようになりました。それをずっとモットーにして試行錯誤を重ねられて、今日があるわけなんですけれど、それはヨーグルト作りにしるチーズ作りにしる、新しいことを始めるには一朝一夕にはいかないですよ。

試行錯誤の繰り返しだったと思うんですけど、ご家族の協力もありまして、強い信念のもとに、努力された精進の賜物で、今日があるんだと思います。「想い、想え、想えば叶う」という言葉がありますが、鈴木さんはまさにそれを20年かけて実践されたんだと思います。鈴木さんの熱い想いを未だに私の心の中に残っています。やっぱりその土地に立ってその風

に吹かれて、そのお話を聞くっていうのは、やっぱりどんなに活字で知るよりも、本当に細胞の一つ一つに入っていく感じがして、牛乳だったら鈴木さん、チーズは鈴木さんって感じで、生協の生産者さんもみんなそうですけれども、牛乳に関して言えば本当にもう懐かしいというか長い間のお付き合いですので、本当に今日はいれしゅうございます。

本当にありがとうございました。ですから私達も鈴木さんの努力に対して、やっぱりしっかり支えさせていただかなくてはいけないと思うんですよ。だから私たちもしっかり支えますので、鈴木さん今後ともよろしく願い致します。お粗末でしたけれど、これで失礼いたします。

初代牛乳プロジェクト担当理事として北海道まで視察に行きました！！

第14期 理事 つくば市の松田 ミカさん

こんにちは、つくばから来ました、松田ミカといいます。今ご紹介いただいたように、生協の中で組合員理事のなかで牛乳プロジェクトを立ち上げることになりまして、牛乳担当にさせていただきました。そしてびっくりするくらい本当にいろいろ勉強させてもらって、本来なら組合員理事としてその知識を還元しないといけなかったんですけど、その理事を4年勤めましたあと、仕事を始めましてそれで今日に至るまで仕事にまい進してまいりまして、あんまりみなさんにそれをきちんと還元する機会がなくて、今日こうしてみなさんに熊谷先生のことや鈴木先生（笑い）、鈴木さんにお会いして、先生なんですけど私の中では、いろいろ教えてもらったことをみなさんにお話しできる機会があるということは大変ありがたいことだと思っています。

ちょっとこういった場で話すのが慣れていないので、伝わりにくいかもしれないんですけど、ご辛抱して聞いていただければと思います。まずは大石さんから「牛の勉強だ！」ということで、「まず現地で見ると」言われまして、鈴木牧場さんに連れて行っていただきました。

行かれた方もたくさんいらっしゃると思うんですけど、もう本当に気持ちのいい場所です。お母さん牛たちは他の牧場よりもうんと長生きして、お乳を搾らせてくれている。

若い牛さんたちも興味津々でお客さんを見つめてきますし、子牛ちゃんたちはもうあのかわいさです。私も娘たちを連れて行きましたが、本当に気持ちのいいところです。そして清潔な牛舎で、牛のご飯を見せていただきました。健康な清潔な牛が育つには、あのお尻とか全然汚れてないんです。おなかの調子が非常にいいので。牛ちゃんたちをどうやって、そういう体調を保てるのかをお聞きしましたら、サイレージという発酵食品を牛たちに食べさせているというお話でした。

今でこそ腸内フローラとか菌活とか、言われていますけれども、そのころまだあまりそういった言葉があまりなくて、「そうなのか！発酵食品か！まあ人にもいいんだしな」ぐらいな感じで聞いていたんですが、それも牛にも食



べさせるのかぐらいな認識だったんです。でも、その後いろいろ勉強させてもらって、牛のおなかの中というのは食物繊維を消化するために牛の胃の力で分解できるのではなくって、沢山の微生物や菌が活動してくれることで食物繊維も、牛乳に変えていく力になる栄養になる、そういう働きがあるということで、サイレージというのが牛にとって非常に重要な食べ物であることが分かりました。

そのサイレージの作り方ですとか、牛の健康を保つための土づくり、それを鈴木先生に教えてくれたのが、北海道にいる獣医さんの熊谷先生です。今度は「熊谷先生の話聞きに行くぞ!!」って大石さんに言われまして、はるばる北海道まで行きました。実は私北海道に行くのが初めてだったので、かなり観光気分で行ったんですが、3日間ほんとうに牧場を回りました。3日間ずっと朝から晩まで牧場を、、、。その時の写真がありますんで、回していただけたらと思います。小さいアルバムが北海道に行った時の写真で、大きいのは福島にありました、みちのくグリーン牧場。私たちが山木屋さんと呼んでいた方の牧場の写真です。両方共とても勉強させていただいた牧場です。

熊谷先生は札幌酪農というサツラクさんに牛のことを定期的に教えていらっやあって、18年も前なんですけれども、札幌酪農の酪農家さんたちのところを順繰りに回ってご指導なさっていました。

その講習に私たちも3日間参加させていただきました。どんな牛がこの中で今一番乳量を誇っているか、どの牛のがおいしいかっていうのをいろいろ見せていただきまして、やっぱり見るからに健康的で美しいお母さん牛がとてもおいしい牛乳を出します。それで、この牛きれいですね〜という牛のお乳はほんとうに甘くて、今鈴木さんからもらった牛乳のようなほんとに自然な甘さで、美味しいんです。それで、そうでないちょっと調子悪いんじゃないかなあ〜という牛ちゃんのお乳をその場でしばったのをいただきますと、少し舌を刺すようなピリッとくるような味がして、「あ〜調子悪いんだなあ〜」ということがわかりました。

草だけでたんぱく質を作り出す牛ちゃんたちにどうやって元気でいてもらうかっていうことを、サツラク酪農の人たちも一生懸命考えていらっやあって、熊谷先生から一生懸命指導をうけていらっやいました。私たちも3日間一緒にいましたら、だんだんとその牛舎の中でどの牛が今一番稼ぎ頭かというのが、見分けがつくようになってきました。そういう覚えだけ私は良いんです。最後三日目ぐらいには、「この子!!」ていうと「当たり!!」みたいな感じでわかりました。今写真を回していますが、すばらしく白黒のラインもきれいで模様もきれいで、健康的な美脚の牛さんたちが活躍していました。

今、腸内フローラと言われてますが、微生物や菌が暮らしやすいようなおなかの中を維持するというのは本当に菌が大事で、私たちの体もそれは同じなんです。やっと最近分かってきたことですが、あなたの体の9割は細菌とか、寄生虫なき病という本に書いてあるんですが、私たちもほとんど菌でできているようで、おなかの中だけじゃなくて、沢山の菌に囲まれて共生して暮らしています。それが、18年前から熊谷先生は牛たちにそうだっていうことを一生懸命教えてくださっていました。



常総生協の組合員さんにも人気のあった「山木屋ノンホモ牛乳」原発事故の放射能汚染により、みちのくグリーン牧場は廃業、牛は殺処分となりました。

熊谷先生とは別なんですけれども、福島にも山木屋さんという牛乳をつくっていたみちのくグリーン牧場がありました。そこは福島第一原発の事故で避難区域に指定されてしまったので、今はもうありません。でもその山木屋さんの牛乳も、今鈴木さんの牛乳をいただいて山木屋さんの牛乳を思い出しましたが、山地型の牧場を経営したいということで素晴らしい牛たちと牛乳を作っていたらいいです。サツラクさんには熊谷先生のお話を聞いて一緒にやる仲間が

いて、山木屋さんは独自のプラントを持ってやってらして、鈴木さんも牛乳が飲めたらいいっていうのは、行った組合員の感想としては一番多いもので、なんとか鈴木さんの

牛乳を飲めないかっていうのは、本当に組合員の悲願でありました。今、山木屋さんのこともちょっと触れましたけれど、山木屋さんはもうありませんが、そういった、人が一生かけて作り上げてきた牧場が簡単に原発事故でなくなってしまいました。そういういろ

んな想いがみんな鈴木さんの牧場に結集してとてもとてもうれしいことです。そして、牛乳作りの想いというのが、受け継がれているということが大変うれしく思っています。そんなつたない話でしたが、以上です。

新役員あいさつ (2) 副理事長



副理事長
佐藤 登志子

23期、副理事長に就任しました、我孫子地区の佐藤登志子と申します。私が常総生協に加入したのは、福島原発事故後です。子どもに何を食べさせればいいのか、何を信じたらいいいのかわからなくて、買い物難民になっていた私に、ママ友が「常総生協は事故直後から野菜の放射線量を測っているよ。」と、教えてくれたことが、常総生協に加入するきっかけでした。

あれから7年、私にとっては人生が変わった激動の7年間でした。事故後、あちこちから「関東も危ないから逃げろ」というメールが入る中、夫と相談して、当時小学3年生になったばかりの息子と3人、我孫子に残ることを決めました。その後出会った、同じように思い悩むママ友たちと、市や学校、県に国に、子ども達を守ってもらおうと必死で働きかけた日々。常総生協はそんな私たちと共にありました。自治体にどう働きかけたら動いてもらえるのか模索する中、当時の理事長、副理事長であった、村井さん、大石さんに、まだ古い建物だった生協で相談に乗って頂きました。

2012年に茨城と千葉のお母さんたちがつながってできた「放射能から子どもを守ろう関東ネット」は、2013年6月、衆・参両

院に「放射能被ばくから子どもを守るための対策を求める署名」を出しました。常総生協もこの署名に協力して下さいました。この時集めた署名はわが家が最終集約所でしたが、当時うちに供給に来ていた職員の伊藤さんが汗だくで「佐藤さん！国に署名を提出しますので、ご協力ください！」と、私に勧めてくれました。その伊藤さんは現・専務です。

2013年9月に常総生協を事務局とした「関東子ども健康調査支援基金」ができました。現在発足から5年目、少なくともあと8年、事故の年に生まれた赤ちゃんが15歳になるまで、検診を継続できるよう、運営団体・共同代表・事務局が力を合わせています。発足当時「検診スタッフその1」だった私は今、この基金の呼びかけ人であった木本さんたちと共に基金の共同代表です。

私は2016年の総代会で理事に就任し、現在に至ります。人生、何が起こるかわからないなあと、つくづく思います。組合員7年生にして副理事長となってしまいましたが、理事長を引き受けてくれた理事の同期・増本さんや今期理事・監事の皆さん、私たち組合員のために日々頑張ってくださいている職員の皆さん、そして生協を支えて下さっている組合員の皆さんと一緒に、常総生協を次の世代に残していくための力となれたら嬉しいです。どうぞよろしくお願ひ致します。